

読書のすすめ

「母の肖像」

パール・バック著
新潮社

加奥愛子

最近読んだ本にパール・バックの「母の肖像」がある。読み終わって「あよかった」と思わず口ばししていた。ほのぼのとした感動を与えられた本である。人間愛の薄れていく時代なればこそ、人々は愛を求めてさまよう。しかしほんとうの愛は受けるだけでなく、与える所にあることをパール・バックの母を通して教えられる。子どものパール・バックは衣食住に関しての母の日常生活はもちろん、母の心、考え、行動を細か

くみつめ、母の生き方を通して、いわず語らずの中に、人生観、母からの影響を受け教育されていくことを物語っている。子どもは両親の生き方をよく見ているものである。異国の恵まれない人のために、いくたの波乱の生涯の中にも、雄々しく子どもを育て、多くの犠牲をはらって、その土地に愛を捧げ骨をうめていく。人種を越え、国境を越え、ひたすら人類愛に生きた母の姿に感激する。しかし人間は凡人であるため、絶ち切れない悩み、性格の違う夫婦との問題などもありのままに深く洞察されている。昔も今も子どもにとって母はかけがえのない存在であり、それだけに母が子に対する責任は重大である。にもかかわらず最近、心中、虐待、捨て子、子殺し等の悲し

いニュースが新聞を賑わし夫婦の離婚もふえている。犠牲になるのは子どもである。施設にあずけられる子どものほとんどが母親の蒸発のためであり、三年以内にひきとりにいかないと、子どもは顔も知らないよその人と思ってなつかなくなるとのこと、親子の間で悲しいわくができてしまう。このような悲しい宿命になるまえにくいとめるものは、やはり母の生き方であると思う。私は二十三歳で夫が戦死をし三歳の子どもを育ててきたが、子どもを育てることが生き甲斐であったと思うが……。いろいろな人の生き方を学ぶのに、この本は何かを教えてくれる。電車の中でも手がるに読まれる小冊子である。

(大阪キリスト教短期大学)